

# 三条南ロータリークラブ週報

## Sanjo Minami Rotary Club

2010. 5.10  
No.1952  
No.35



出席率	会員54名中39名
先々週の出席率	91.67%
ヴィジター	長岡東RCより 伊丹敏彦君
先週の メイクアップ	4/22 三条東RCへ 飯山勝義君 嘉瀬 修君 丸山徹夫君 佐々木常行君 田中悌司君 5/7 吉田RCへ 吉井正孝君 5/9 ガバナー連絡会(上越)へ 馬場信彦君 荊澤喜一郎君



### 会長挨拶

三条南ロータリークラブ 会長  
佐藤 嘉男

ご挨拶申し上げます。  
ゴールデンウィークはいかがお過ごしでしたか？ 私は、ひたすら掃除と冬物の片付けをしていました。

そんな中、非鉄金属の国際相場が急続落しています。ギリシャに端を発した欧州の財政危機や、中国が今年 3 回目の預金準備率引き上げによる金融引き締めを嫌気して、銅は 4 月 6 日の 7,965 ドルの年初来高値から 14%下落、アルミも 14%、鉛 17%、ニッケル 18%と全面安になり、また、ユーロ安、ドル安と、今後の経済活動への影響が懸念されています。

4 月 21 日、「地区クラブ活性化セミナー」に参加して来ました。CLP の説明の後、現状調査アンケートの集計結果の発表がありました。残念ながら、アンケートを精査・分析までしてなく、単に数字と意見の羅列だけでしたが、入会 3 年未満、3 年～10 年未満、10 年～20 年未満、20 年以上の 4 グループに分け、それぞれにアンケートを実施し、合計 289 人より回答がありました。

その中の気になる意見をいくつか発表してみたいと思います。

(例会行事が多いため、内容につきましては次週へ。)

### 四つのテスト

一言行はこれに照らしてから

- I 真実かどうか
- II みんなに公平か
- III 好意と友情を深めるか
- IV みんなのためになるか どうか



国際ロータリー会長 ジョン・ケニー [スコットランド]  
第2560地区ガバナー 植木 康之 [柏崎]  
第4分区AG 米山 忠俊 [三条北]  
会 長 佐藤 嘉男  
幹 事 荒澤 威彦  
S A A 熊 倉 高 志

事務局 〒955-8666 三条市旭町2-5-10  
**三条信用金庫 本店内**  
TEL 0256-35-3477 FAX 0256-32-7095  
E-mail info@sanjo-minami.jp  
URL http://www.sanjo-minami.jp

荒澤 威彦 幹事

## 植木ガバナー事務所より「5月ロータリーレート」のご案内

5月1日より 1ドル 90円 → 92円

### メイクアップのお願い

例会を欠席される、された場合、他クラブへ前後2週間の間にメイクアップメイクされ欠席の補填をお願い致します。

なお、下記近隣クラブが例会変更のため記帳ができます。欠席補填にお役立て下さい。

5月13日(木)	三条東RC	(記帳場所)	三条ロイヤルホテル
20日(木)	燕RC		燕三条ワシントンホテル
21日(金)	吉田RC		山岸会計事務所
27日(木)	加茂RC		加茂市産業会館

# ニコニコボックス

NIKO-NIKO BOX

~ 5月10日 11,000円  
今年度累計 603,000円~

- 佐藤(嘉)君 12日に娘が2人目の子供、女の子を産む予定です、帝王切開で…。全部わかっているので何かワクワクしません。若井さん、卓話よろしくお願ひします。
- 荒澤君 若井さん、卓話宜しくお願ひ致します。
- 若井君 本日卓話の当番で大変緊張しています。ロータリーも「事業仕分け」をして、会員卓話を廃止してもらいたい心境です。
- 鈴木(囃)君 久しぶりの例会出席です。卓話の若井さん、ご苦勞様です。

- 野中君、星野君 若井さん、卓話ご苦勞様です。楽しみにしております。
- 安達君 都合で早退させていただきます。若井さん、申し訳ありません。
- 大溪君、田中君、銅冶君、渡邊(光)君 BOXに協力致します。

## Speech

卓話

### 「高校野球の思い出 …最後の一球…」

若井 博 会員

今年も五月に入って、本格的な野球シーズンを迎えました。高校野球も現在夏の前哨戦である「春の北信越大会」が行われておりますし、このあとよいよ「甲子園」に向けて、青春をかけた熱い戦いが展開されます。「野球後進県」と言われて久しかった新潟県も、昨年夏のあの日本文理高校の全国準優勝という快挙によって、一気にモヤモヤが払拭されたような気がいたします。

また三条市の関係では、一昨年は県央工業が「三条から甲子園へ」という地域の念願を果たしてくれましたし、その前の年は三条出身の二人の選手が、明訓高校の中心選手として甲子園の舞台で大活躍をして、一躍三条の名前を高めてくれました。さらにプロ野球に目を転じると、やはり三条出身の金子投手がいまやオリックスのエースとして、大変頑張っております、三条の野球もこのところ全国レベルで光が当たってきたことを強く感じる昨今であります。

私も実は、嘗て甲子園を目指した元高校球児でございまして、言うなれば野球後進県の片棒をかついだ一人かもしれませんが、今日は「高校野球の思い出」ということで話をさせて頂きたいと思ひます。

高校の前に中学時代に遡りますが、私がいた中学は地蔵堂郷中学校(現在の分水中学)~中学時代は、昭和39年の年に新潟県で優勝いたしました。

一応県の優勝投手でしたので、それなりに結構強い高校からの勧誘がありましたが、中学時代の尊敬する先輩が三高野球部で頑張っていましたので、「何が何でもその人と一緒に野球をやりたい」という、その一心で三高に進みました。



三高野球部の在籍は、昭和40年、41年、42年の3年間でありました。一年生のときからマウンドを預けられまして、幸いにも一年生の夏と三年生の夏（つまり昭和40年と42年）の二度、夏の大会で「ベスト4」まで行っております。ただ我々の頃は「ベスト4」とか「準決勝」というよりも、そのあと隣の富山県と争う権利を得るための「代表決定戦」であったわけで、当時はそういう言い方が一般的だったと記憶しております。従って、富山との対戦が残っておりますので、当時の日程は非常に厳しいものでありました。途中雨で流れますと、決定戦へ行くまでの4連投、5連投は当たり前で、まさに“投手受難”の時代。その点今の子供たちは県一校ですし、日程的には随分恵まれていると思います。

三条高校はご存知のように、バスケットとかはメジャーですが、野球に関しては悔しいですけどどちらかといえばマイナーで、まさに県内でも「後進校」と言われても仕方がない状況が、このところ続いております。

それでも夏の大会で言えば、我々から遡ってほぼ10年前の昭和31年には、当金庫の杉野理事長がエースとして夏の県代表になって、長野県と戦っておりますし、逆にほぼ10年後、昭和50年にも一度準決勝まで進んでおまして、それなりに歴史も刻んできております。特に夏に関しては、過去にそういった10年置きのサイクルみたいなものもありましたが、残念ながらそのジックスもいつの間にか途絶えてしまって、久しく朗報が聞こえて来ません。

そんな中で期待しておりますのは、今年から「勝 雅史」という先生が野球部の監督に就任いたしました。三高野球部のOBで、過去に無名校だった六日町高校を、監督として甲子園に導いている実績がありまして、その指導力は関係者の間で高く評価されている人物です。以前から切望されて漸く実現した母校の監督就任。ご承知の様に三高も校舎が移転して、素晴らしい練習環境になったと聞いておりますので、新しい監督の下で起死回生の活躍を期待したいと思います。

さて皆さん、「今井 雄太郎」という名前をご存知でしょうか。プロ野球の阪急ブレーブスで大活躍をし、通算130勝の勝ち星をあげた、新潟県の野球人としては突出した実績を持つ大投手であります。実は私にとっては高校時代のライバルで、生涯忘れることの出来ない男であります。彼とは昭和24年生まれの同期で、同じ同期にはジャイアンツで新人王を取った、あの関本投手もおります。

今井氏は現在佐賀県に在籍して、関西・九州方面の野球解説者として頑張っておりますし、関本氏も巨人のコーチを経て、ラジオやスポーツ紙で評論活動を行って、それぞれ野球の関わりの中で活躍している毎日。

新潟の野球史を代表する二人が我々の同世代（42年組）から輩出されたということは、時を同じくして共に闘った一人として大きな誇りとしております。

さて今井雄太郎ですが、彼は中越高校から新潟鉄道管理局（ノンプロの国鉄新潟）を経て、1970年のドラフト2位で阪急に入団いたします。“ノミの心臓”と呼ばれるほど気が弱く、はじめの6~7年はなかなか結果が出せずに、非常に遅咲きの苦労人でありました。当時の上田監督が考えたあげく、缶ビールを飲ませてマウンドに送り出した話はあまりにも有名ですが、それからというものは、眠っていた才能が一気に開花して完全試合、最多勝、最優秀防御率、ベストナイン…と、リーグを代表する投手として登りつめるわけであります。勝ち星の大半をプロ入り後8年目くらい…年齢にすると30近くなってから稼いでいるわけで、まさに大器晩成の典型と言えるかと思えます。

もともとプロの中でもタマの早いピッチャーとして有名でしたが、もちろん高校時代もそれはもうすごいボールでした。私もバッターとして何度か対戦しておりますが、例えば真ん中ベルトあたりに来たタマをスイングすると、目の高さに来ていたといった、（CG映像を思わせるような）まさに「剛球」と呼ぶにふさわしいボールでした。私も永い間野球と接しておりますが、少なくとも高校生であれだけのタマを放る選手はまだ見ておりません。

実は当時の国鉄新潟の監督が三条高校のOBで、私も熱心に誘われましたが、今考えますと、今井のような怪物と競争していようものなら、間違いなく人生狂ってしまいましたので、つくづく思い留まってよかったなと思っております。

高校3年間の一試合一試合、殆んど記憶に刻まれておりますが、一番思い出に残っている試合は、やはり今井の中越高校と戦った最後の試合です。昭和42年夏の大会、県の代表決定戦でした。

舞台となった悠久山球場は、当時の中越高校の地元でしたので、スタンド全体を“敵”に回した雰囲気だったのを今でも鮮明に覚えております。

今井雄太郎とは、それまで公式戦で二回対戦して一勝一敗でしたので、最後の夏の代表決定戦は、まさに雌雄を決する戦いでありました。

試合の方は1-1のまま最終回までもつれまして、9回ウラの相手の攻撃でツーアウト満塁のピンチを迎えてしまうわけですが、正直私の中では、敢えて選んだ満塁策だし、調子は別に悪くなかったもので、「これで延長

戦だな」と内心思ったのですが、落とし穴が待っておりました。

バッターを2-2に追い込んでからのキャッチャーの次の要求が「インコースのシュートボール」。いつもは追い込んでからは、外側の真っすぐか落ちるカーブで仕留めるパターンでしたが、その時だけは「インシュート」のサインが頑として変わりませんでした。状況が9回ウラ、ツーアウト満塁でしたので、あれやこれや頭をよぎりまして、あまり内側には投げたくない、というのが私の気持ちでしたが、結局はサインが変わらず踏ん切りのつかないままサイン通りに放ってしまいました。

結果的にはそれが最後の一球になるわけですが、相手の執念と私の迷いが乗り移ったように、詰まった打球がシュートの後方にポトン…と落ちてまして（あの場面は今でも夢に出てきますが）サヨナラ負けで最後の夏は終わってしまいました。

正直のところ投げたくない球を投げて負けたという点で、悔いが残っていないかと言えましょうそになりますが、じゃあ思い通りの投球をしたからといって、うまく行ったかどうかはわかりません。

ただ間違いなく、いまの私の仕事や人生に生かされていることは、とにかく「迷った時は“ストレート勝負”」。問題に突き当たったら、その問題が困難であればあるほど、変化球で逃げないで「真っすぐで相手にぶつかれ!」ということ…最後の一球は、そんなことを教えてくれたような気がします。

いずれにしても勝敗はともかく、あの今井雄太郎と最後まで投げ合えたことは、掛け替えのない思い出ですし、これからも大切にしていきたいと思えます。

例の最後のボールは、ベンチの監督からの指示であったことを、あとで聞かされましたが…あれから40年以上経った今でも、実はその最後の一球をめぐって、先生を囲みながら楽しくワイワイやっております。もちろん先生は引退された今でも、「あのインコース勝負は間違いなかったぞ、」と頑張っておられます。

その監督だった土屋正先生ですが、三条高校からその後、中条高校、新津南高校でも引き続き野球部監督として、精力的に指導に当られました。ところが、不幸にもそのあと間もなく難病におかされ、車椅子の生活を余儀なくされてしまいました。しかしながら野球に対する情熱は以前と全く変わることなく、その後も車椅子のまま監督として指揮をとられ、他の指導者や高校野球関係者に深い感銘を与えました。大変な逆境の中で「甲子園」を追い続けた土屋先生の姿には、本当に頭の下がる思いで一杯です。

以前県の高野連会長を務められた安田辰昭先生も、ご自分の著書の中で「車イスの監督」と題して、土屋先生を「崇高な求道者に接する思いである」と、称賛しておられます。

残念ながら、我々は甲子園へは行けませんでした。そんな土屋先生から三年間熱血指導を受けたこと、そのこと自体が甲子園以上に十分価値のある“もうひとつの甲子園”だったのではないかと強く感じております。

先生を皆で励まそうと、三高時代八年間の教え子で「つちや会」を作って、今でも時々先生を囲みながら昔の思い出に花を咲かせております。この会をいつまでも続けて、いつか土屋先生に「あの最後の一球はオレの間違いだった」と言わせてやりたい～そのためにも、先生にはいつまでも元気でいて頂きたいと思っております。

最後に、この夏の高校球児たちの熱いドラマに期待して、卓話に変えさせていただきますが、特に三条高校の大ブレイクに期待して…とにかく一度、あの甲子園で“風空囊を翻し…”の校歌を全国に轟かせてもらいたい、それが私の大きな夢です。

## この辺でちょっと一休み

### 江戸山唄

待てよ?

二人で共同で地酒を造ろうということになり、出しまえのことになり、出しまえの一人が、「おまえは米、俺は水でーことじゃどうだ」

「で、出来たものの取り前は」と、もう一人が申しますと、

「きまつてるじゃねーか。米を出したおめーは酒粕、水を出す俺はかすをしぼった水だけ貰えば十分だ」

(天明頃、うぐいす笛  
東京銀座RC元会員・  
岡田晃雄著  
「江戸小咄和英文柄」  
から

## 表紙について

東山 魁夷 (ひがしやま かいい)  
神奈川県出身(1908-1999)

■「緑響く」 1982年(昭和57年)作  
長野県信濃美術館東山魁夷館蔵

ロータリーの友 1995年6月号表紙より

三条南ロータリークラブ週報

2010. 5. 10

No.1952 No.35